

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370852

研究課題名(和文)19世紀ロシア帝国の文化統合における保守思想の役割に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Role of Conservative Thought in Cultural Integration of the Russian Empire during the 19th century.

研究代表者

下里 俊行(Shimosato, Toshiyuki)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：80262393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ロシアの保守思想家を分析した結果、ロシア正教聖職者の保守派が対抗したのは神秘的プラトン主義とフリーメーソンという文化傾向であり、国民啓蒙省官僚や大学教授は多民族空間としてのロシア帝国の現実を反映した保守的ロシア史観を展開したが、保守派言論人はロシア民族独自の文学や歴史学の創造の重要性を主張したが、流刑後には、ロシア帝国の多民族性の現実を認識し、民族誌研究を通じて民衆文化を研究する意義を主張し始めたことを明らかにした。結論として、欧州の啓蒙主義の危機の結果としてロシア保守思想家達はロシア文化の独自性を洞察するためのロシアの諸民族の民族誌研究を推進する必要性を認識するようになったといえる。

研究成果の概要(英文)：Analysis of the tendency of conservatives within the Russian Orthodox clergy revealed that they acted in opposition to the cultural trends of mystical Platonism and Freemasonry. In addition, it revealed that officials of the Ministry of Public Education and professors had views on the history of Russia that reflected the reality of the Russian Empire as a multiethnic space. Moreover, the analysis clarified that the conservative journalist asserted the importance of creating literature and historiography that had Russian nationality. However, after his exile, he recognized the reality of Russia's multiethnicity and began to affirm the significance of studying popular culture through ethnography. In conclusion, as a result of the crisis within the European enlightenment in the first half of the 19th century, conservative thinkers began to recognize the need to promote the ethnographic study of the people of Russia, offering vital insights into the original elements of Russian culture.

研究分野：ユーラシア史

 キーワード：ロシア正教 ロシア・プラトン主義 ロシア・フリーメーソン ロシア国民啓蒙省 多民族国家ロシア  
 ロシア文学 ロシア歴史学 ロシア民族誌

## 1. 研究開始当初の背景

従来の19世紀ロシア帝国史研究においては、帝国内の多様な宗教・文化的諸要素、特に帝国の周辺地域の多種多様な非ロシア民族や非ロシア正教徒（カトリック、プロテスタント、旧教徒、ユダヤ教徒、ムスリム、仏教徒など）に対する統治政策の特質が「同化と異化」、「個別主義」等の概念によって分析されてきており十分な研究蓄積がある（高田2012;宇山2012）。他方で、従来の19世紀ロシア思想史研究では、在野の知識人による体制批判思想（自由主義、急進主義、西欧主義、スラヴ主義など）に関して充実した研究蓄積があるが、帝国統治のためのイデオロギー的素材を提供した体制派の保守思想に関する研究蓄積は希薄である。その中で欧米や日本では、19世紀前半の国民啓蒙省大臣セルゲイ・ウヴァーロフの官製国民性の理論を中心に一定の研究蓄積がある（Riazanovsky1969; Whittaker1984; 高野1999）。だが、これらの先行研究では専制体制の維持という政治的側面からの分析に限定されていた。そのためロシア帝国の宗教・文化統合の基軸として宣言された「ロシア正教」と「国民性（ナロードノスチ）」の概念の内在的な論理構成や、同時代の西欧での保守思想との相互関係が十分研究されてこなかった。ただし、最近になってロシアの研究者を中心に、保守思想の文化的側面に関心を向けながら、ロシアと西欧の保守思想の相互作用が検討され始めており、ウヴァーロフにおける「汎ヨーロッパ的古典主義」への共鳴（Frolov1999）やウヴァーロフとド・メーストルとの共通性と差異（Degtjaryova2006）などが分析対象となっている。しかし、西欧とは異なり、ロシア保守思想は、専制擁護という政治課題だけでなく、東方への帝国拡大に伴う膨大な非ヨーロッパ的・非ロシア的な宗教・文化的要素（アジア系諸民族とその諸宗派）を包摂するかたちでロシア帝国の宗教・文化統合戦略を構築しなければならないという独自の課題に直面していた。つまり、ロシア帝国の「周辺」に位置する「アジア」の宗教・文化的要素に対する保守思想家たちの姿勢を解明する課題が日程に上っている。同時に、西欧の保守思想における宗教的要素の重要性が指摘されているように、「伝統」を重視する保守思想の宗教的・神学的側面の分析は不可欠である。特に、ロシア帝国領内には「アジア」の宗教的要素のほかに正教以外のキリスト教徒やユダヤ教徒が少なからず居住しており、ロシアの保守思想が帝国の多宗派的状況と、支配的宗教としての「ロシア正教」に対して、どのような態度をとったのかを分析することも重要な課題となっている。また、ロシア保守思想の形成に決定的な影響を与えたのは、1789年のフランス革命とそれに触発された1825年のデカブリストによる武装蜂起である。その後の反体制的な思想行動様式としての「ニヒリズム」や暴力的体制変革の行

動としての「テロリズム」は、支配的文化に対する「対抗文化」として解釈されている（下里2004; Anemone2010）。また、革命党のテロリストの攻勢という文脈の中で、保守思想の分岐の様相が明らかにされてきている（Tvardovskaja2004; 和田2005; 下里2006）。つまり、ロシア保守思想内部での文化統合戦略の分岐・多様化の重要なメルクマールとして同時代の「対抗文化」に対する評価・態度のあり方を分析することも重要な課題になっている。そこで、ロシア保守思想を「アジア」、「ロシア正教」、「対抗文化」の3つの視角から分析することで、その文化的特質を析出することが可能となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、19世紀のロシア帝国の宗教・文化政策における保守思想の役割を明らかにするための基礎的研究として、帝国の宗教・文化政策の主要な担い手であった国民啓蒙省・宗務院官僚、大学教授、高位聖職者、体制派言論人からなる保守思想家の言説を、（1）「アジア」観、（2）「ロシア正教」観、（3）「対抗文化」観の3つの視角から分析することで、彼らがロシア帝国の文化統合のために如何なる戦略を構想していたのかを析出し、彼らによる「ロシア固有の伝統的なもの」の創造の論理とその根底に横たわるエートス（倫理的価値性向）とともに、その内在的矛盾を解明することを課題とする。

本研究の展望についていえば、本研究代表者は、これまで19世紀反体制思想（特にナロードニキ、ニヒリズム、テロリズム）の研究（下里1997,2004,2006）その延長線上でロシア知識人の「アジア」表象の分析をおこなったが、その狙いは、従来、ロシアと西欧という二項図式で分析されてきた従来の思想史研究に対して、ヨーロッパとアジアというより大きな枠組でロシア思想の世界史的意義を解明することであった。同様の課題意識から、すでに「ロシア正教」の聖職者・神学者たちの思想の内在的論理の分析に取り組み、正教聖職者・神学者は、世俗官僚が考えた帝國的な文化統合の支柱というロシア正教に対する政策的要請からは相対的に自律した独自の思考・論理を有しており、体制イデオロギーの構成要素として単純に位置づけることができないことを明らかにした（下里2008,2011,2012）。その結果、浮上したのが、帝国の宗教・文化政策に実質的に影響力を行使した世俗官僚・体制派知識人（大学教授、言論人）・高位聖職者の保守思想を「アジア」、「ロシア正教」、「対抗文化」という3つの文化概念を軸に具体的に分析するという課題であった。この課題を解決することによって19世紀ロシア帝国文化史をより立体的に理解することができると予想した。

参考文献：Anemone, A. (2010), *Just Assassins: The Culture of Terrorism in Russia* (Northwestern UP); Degtjaryova, M. I. (2006),

Luchshe byt' jakobintsom, chem feijanom // Voprosy filiosofii, 7; Florov, E.D. (1999), Graf Sergei Semenovich Uvarov i akademicheskii klassitsizm // Peterburgskaja akademija nauk v istorii, SPb.; Riazanovskij, N.V. (1969), Nikolas I and Official Nationality in Russia, 1825-1855 (Berkeley); Tvardovskaja, V. A., Itenberg, B. S. (2004), Graf M. T. Loris-Melikov i ego sovremenniki. M.; Whittaker, C. H. (1984), The Origins of Modern Russian Education: An Intellectual Biography of Count Sergei Uvarov, 1786-1855 (DeKalb); 宇山智彦(2012)『ロシア帝国論』『ロシア史研究案内』彩流社; 高野雅之(1999)『十九世紀ロシアの保守思想 文部大臣ウヴァーロフと公式国民性』『社会科学討究』44 巻 3 号; 高田和夫(2012)『ロシア帝国論』平凡社; 下里俊行(1997)『「ナロードニキ」概念の再考』『ロシア史研究』60 号; 下里俊行(2004)『ペテルブルク『偽装結婚』物語』『集いのかたち』柏書房; 下里俊行(2006)『1881年3月1日事件をめぐる』『ロシア思想史研究』3 号; 下里俊行(2008)『1850年代のロシアにおける正教的プラトン理解』『プラトンとロシア』; 下里俊行(2011)『あるロシア正教神学生の自己形成史』『スラヴ研究』58 号; 下里俊行(2012)『ナデーヂュチンによるプラトンの哲学体系の再構築とその哲学的文脈』『ロシア史研究』89 号; 和田春樹(2005)『テロリズムと改革 アレクサンドル二世暗殺前後』山川出版社。

### 3. 研究の方法

本研究では、19世紀初頭から1825年のデカブリストの蜂起へて、アレクサンドル3世が没する1894年までを対象期間として、帝国の宗教・文化政策を担当した国民啓蒙省大臣、科学アカデミー総裁、宗務院総監、内務大臣、皇帝官房第三部長官、大学教授、神学大学教授、保守派言論人のなかで、書籍・定期刊行物を通じて、帝国内外の「アジア」の宗教と文化、「ロシア正教」とその他の宗派、そして帝国内外の「対抗文化」としてのニヒリズムやテロリズムの動向について帝国秩序を護持する立場から比較的体系的な思想を表明した言説に限定して分析した。

分析方法は、思想史研究の方法をとり、鍵となる諸概念をそれぞれの思想家の言説の文脈のなかで読解した。

### 4. 研究成果

本研究経費をもちいて、以下の出張によって資料調査と研究発表をおこなった。

2014年3月23日～3月30日にモスクワに出張しロシア国立図書館にて資料調査を実施した。

2014年9月2日～5日に早稲田大学中央図書館にて資料調査を実施した。

2015年3月20日～4月2日にサンクトペテルブルクに出張しロシア国民図書館にて資料調査を実施した。

2015年10月10日～11日に早稲田大学でのロシア史研究会大会に出席し研究交流を実施した。

2016年6月3日～13日にポーランドに出張しヨハネ・パウロ2世大学による国際会議にて研究発表し、その後、ワルシャワにて資料調査を実施した。

学会・研究会での口頭発表および論文のちがいで発表した研究成果の概要は、以下の通りである。

ロシア正教会の高位聖職者層における保守思想の動向について1800～1820年代を中心に分析した。その結果、アレクサンドル1世時代の支配的思潮である神秘的プラトニズムの傾向とフリーメイソンの文化潮流に対して、教会保守派として登場したのは、18世紀後半から継承された啓蒙主義的なライプニッツ・ヴォルフ派哲学に立脚した予定調和的世界観をもち、信仰と理性の分離を志向する流れであったことが明らかになった。この流れは18世紀後半では改革の主流を形成していたにもかかわらず、19世紀初頭になると逆にカント哲学に対して否定的な立場をとることで、実質的に観念論を否定する経験主義的な思潮として作用することになり、結果として改革に対する保守派としての立場をとることになる。このことは、第1に、「ロシア正教会」の高位聖職者層の内部に異なる思想傾向をもつ思想家が存在していることを示しているだけでなく、第2に、18世紀的な啓蒙思想に立脚した保守思想家たちは、ある意味で初期「西欧派」的な立場にあったが、その後に登場する、やはり西欧起源の神秘主義的プラトニズムという支配的潮流の改革志向に対して、ある種の「対抗文化」として機能したことを意味している。ここに急激な変化に対する抵抗思想としての保守思想の一側面を見いだすことができる。また、後者の神秘主義的プラトニズムの潮流は、フリーメイソンとの濃密な関係をもちつつ、「アジア」文化（具体的にはユダヤ文化 この時期、ユダヤ人はアジア人の範疇で理解されていた やハンガリー文化）に対して観念的ではあるけれども肯定的な見方をもっていたことが明らかになった。その背景には、聖書研究の進展によるヘブライ語などオリエント文化への関心の高まりがあったことを指摘することができる。「対抗文化」との関係についていえば、19世紀初頭に確立した多宗派体制のもとで、この体制を批判する勢力の中核にロシア正教会内外の守旧派を位置づけることができるのではないかという示唆が得られた。他方、デカブリストに代表される急進派の思想的背景には、西欧起源の諸理念があり、この二つの分離主義的な傾向に対して、体制内の保守思想は積極的に文化統合の理念と政策を打ちだす必要にせまられたのではないかという示唆が得られた。

19世紀前半の文部官僚セルゲイ・ウヴァーロフ(1789 - 1855)の歴史観および歴史教育についての見解、モスクワ大学初代ロシア史教授ミハイル・ポゴーディン(1800 - 1875)の歴史観およびロシア史観を、それぞれ検討し、彼らがエスニックとしてのロシア人(ロシア語を母語とするロシア帝国臣民)を必ずしも中心化・特権化しない立場から、多民族空間としてのロシア帝国の現状に対応した歴史観を表象していたことを明らかにした。また、保守派の雑誌『望遠鏡』誌の発行人ニコライ・ナデージュチン(1804 - 1856)の歴史観を検討した結果、ナデージュチンが、ロシア語を母語とする「ロシア人」の民族的個性(ナロードノスチ)を重視した文芸と歴史叙述の重要性を訴え、「理想的な君主」としての皇帝ニコライ1世に期待をしていたが、「哲学書簡」事件による雑誌の発禁と流刑処分が決定された後には、ロシア帝国の多民族性を積極的に認めたとすえ、民衆の口承文芸を研究することの重要性を再認識するようになったことを明らかにした。総じていえば、1830年代のロシアの代表的な保守思想家の言説を分析するなかで、検閲体制のもとで正教と専制を支持する保守的な言説の背後にある微妙な思想的ニュアンスがあることが明らかになった。また、分析した保守思想家の言説の根底に共通してあったのは「摂理」概念であり、それは一方で被造物の「存在」を正当化するとともに、その存在の将来での「変容」をも承認するものであると同時に「存在」の「否定・破壊」にたいする否定的な姿勢をもたらしものとして機能していたことを指摘した。また、1830年代の保守思想家たちの「ロシア正教」に対する評価は、比較的消極的であることが明らかになった。このことは、ロシア帝国の住民の多宗派・多民族性という現状を追認するためにも、特定の宗派・民族を特権視することは帝国の文化統合の観点から好ましくないという事情を反映している。その意味で、保守思想家はかなり高度な西欧的教養をもっていたにもかかわらず、あるいは、そうだったからこそ、非西欧的文化である「アジア文化」に対して寛容であるだけでなく積極的にその意味を理解しようとしていたことが明らかになった。この場合、アジア文化とは何よりもまず聖書に由来するヘブライ文化であり、帝国領内におけるカフカス人やタタール人の要素にかかわっており、これらの要素は、世襲貴族であった保守思想家たち自身の出自にも関連していたのではないかという示唆が得られた。したがって、多宗派・多民族から構成されるロシア帝国の主流の文化に対して「対抗文化」として登場したのが、エスニックな意味での「ロシア性」を強調する思潮である。ナデージュチンに代表される保守的言論人は、体制イデオロギーの「ナロードノスチ」の命題を、一方で、エスニックな意味での「ロシア人」として解釈し、他方で社会階層的な

意味での「民衆」として解釈することによって、世襲貴族層の多宗派・多民族原理に対抗しようとしたのではないかという仮説を提示することができた。

1840 - 50年代におけるロシア地理学協会における民族誌学(エスノグラフィー)研究における保守思想を分析した結果、民族(ナロード)の概念を、言語を中心とする文化的な範疇で捉えようとするナデージュチンに代表される保守的な思潮と、それに対してフォン・ペーアに代表される民族を自然主義(人種主義)的・生物学的な「実体」として捉えようとする進化論的な潮流との確執が明らかになった。この時代になると「ロシア正教」は、言語を媒介にしてスラヴ民族の民族的個性(エスニシティ)の一属性として再解釈されるようになり、同時にロシア帝国の文化的アイデンティティの中心概念として押し出そうとする傾向も生じていく(スラヴ派)。このようなロシア民族の文化概念化の潮流は、従来の多宗派・多民族体制を否定する契機を内在させていたため、非ロシア民族出身者の反発を呼び起こし、そのことが、民族を非文化的に把握する方法としての自然主義的・生物学的な視点への関心の高まりの背景になっていると予想され、この科学主義的視点が、その後の帝国支配に対する「対抗文化」の思想的基盤になっていくのではないかという示唆が得られた。他方、ロシア帝国の東方への領土的拡大にともない、シベリアの少数民族への関心も高まり、「アジア」文化への眼差しも変容していくのではないかという示唆が得られた。とくに、1840年代以降、ロシア地理学会・民族誌学会会長ナデージュチンを中心に諸民族のエスニックな民族的特性を実証的に解明するための理論的枠組みが起草され、斉一的な民族誌学調査が組織されたことが明らかになった。

19世紀後半の保守派の動向について概観した結果、1840年代のスラヴ派の流れを引くイワン・アクサーコフが国家に対する「社会」の自主性を擁護し、ストラーホフが独自の「有機体」的世界観を提起し、ダニレフスキーが文化の「類型」論を提起したが、いずれも西欧起源の機械論的な唯物論や進化論の画一的な世界理解に対抗し多様性を擁護しようとしたことが明らかになった。

本研究の成果について、総じていえば、ロシアの保守思想とは、ロシア正教、アジア、対抗文化に対して一義的な対応していたわけではなく、ロシアの多様な思想潮流のなかで、一方で、ラディカルやリベラルな傾向と、他方で、守旧派ないし復古派的な傾向とのあいだで全体性・調和性・漸進性を重視しており、その意味で、様々な「排除の論理」にたいして抵抗する勢力として、ロシア帝国の文化統合に寄与する役割を果たしたのではないか

という示唆が得られた。

本研究の今後の課題と展望についていえば、多宗派・多民族体制によるロシア帝国の文化統合が、様々な方向性をもつ「排除の論理」を内在させた極端な思想を統制・抑圧することによって存立していたとすれば、そこで浮上するのが、民族誌学部会や内務省における民衆の宗教文化（特に「セクト」と「異教」）への視線のあり方を解明することである。それは、ロシア帝国の文化統合とその限界の未解明な部分にアプローチするという課題である。

この課題は、次のような研究状況と関連している。すなわち、帝国内の多様な宗教・文化的諸要素、特に帝国の周辺地域の多種多様な非ロシア正教徒（カトリック、プロテスタント、アルメニア教会各派、古儀式派、ユダヤ教徒、ムスリム、仏教徒）に対する統治政策の特質が帝国権力と被治者側の代表者達との相互作用を中心に解明されてきた結果、抑圧面だけではなく、各宗派に対する属人的個別対応や寛容・統合の側面へと研究力点が移行してきたという状況である。だが、それ以外の公認されざる集団として「セクト」と称された非伝統的諸宗派、「異教」と呼ばれたキリスト教以前の土着信仰に対する保守思想家を含めて帝国支配層の眼差しは十分解明されてこなかったことが大きな課題として浮上してくるのである。これらは、19世紀後半の革命運動の地下組織とならんで、ロシア帝国の文化統合にとって大きな「躓きの石」であり、それらに対する支配層の理解の仕方は文化統合の質の問題を解明するうえで大きな意味をもつのである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

下里俊行、『望遠鏡』編集発行人ナデーヂュチンの永遠・時間・歴史概念、ロシア語ロシア文学研究、査読有、第46号、2014年、1-17頁。

下里俊行、1830年代のロシア保守思想家達の「ナロードノスチ」概念の再検討、ロシア史研究、査読有、第95号、2014年、3-26頁。

T. Симосато、Н.И. Надеждин: от эстетики и литературной критики к этнографическому изучению культуры, *Вестник Московского университета. Серия 7. Философия*. 査読有、No. 5, 2015, С. 16-28.

下里俊行、近代ロシア正教聖職者教育におけるプラトン主義の起源：ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラー追放事件を中心に、スラヴ研究、査読有、第62号、2015年、73-107頁。

T. Симосато、Переосмысление концепции «народность»: С. С. Уваров как консервативный мыслитель, *Мысль. Журнал*

*Петербургского философского общества*. 査読有、No. 20, 2016, С. 87-97.

Тосиюки Симосато、О понятиях вечности и времени у Николая Надеждина как издателя Философского письма Петра Чаадаева, *Logos i ethos*. 査読有、Vol. 43, No.2, 2017, pp. 229-243.

〔学会発表〕(計5件)

下里俊行、ニコライ・ナデーヂュチンの歴史哲学とロシア史観、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター、2014年3月7日、札幌市。

下里俊行、ニコライ・ナデーヂュチンの民族学研究におけるプラトニズム、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター、2014年8月28日、札幌市。

Тосиюки Симосато、Н. И. Надеждин: От христианской платонической критики к этнографическому изучению, ICSEES, 第9回世界大会・幕張大会、2015年8月5日、千葉市。

Тосиюки Симосато、О концепциях вечности и времени Н. И. Надеждина как издателя "Философских писем" П. Я. Чаадаева, Krakow Meetings: Krakow Conferences on Russian Philosophy 2016, 2016年6月8日、クラクフ(ロシア)。

T. Симосато、О формировании образа Платона как символа "русской" философии в сочинениях В. Н. Карпова, Четвертые Международные чтения по истории русской философии, Санкт-Петербургский государственный университет, 2016年9月20日、Санкт-Петербург(ロシア)。

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/simosato/>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

下里俊行 (SHIMOSATO TOSHIYUKI)

上越教育大学大学院・学校教育研究科  
・教授

研究者番号：80262393